

館藏 大黒屋光太夫遺物

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

高野明

はじめに

西暦一七八四年(天明四年)に、露都で刊行された標記の文献は、寛政四年(一七九二年)に、第一回遣日使節ラクスマン(Адам Кириллович Таксман) 坐乗の二櫓船エカテリナ号(Бригантия «Екатерина»)によって送還された三名の伊勢漂流の一人、亀山領白子村持船神昌丸の船頭大黒屋光太夫(幸太夫)が、ロシアから持ち帰った文献中の一本である。周知のとおり、光太夫をはじめ、十七名の乗組員が、天明二年(一七八二年)に駿河沖で遭難し、それから十年余の歳月を経て無事に帰国した者は、エカテリナ号が根室に着いた際に病没した小市を除けば、わずかに光太夫と磯吉の二名にとどまる。鎖国時代を語り、また日露交渉のいにしえを回顧するとき、だれしも

忘れえないこの流離の旅路については、すでに数知れぬ古記録が現存し、これに関する研究も少なくない。

昭和三十二年に、岡村千曳先生が神田の某書肆で見出だされ、本館の所蔵に帰した標記の文献については、若干考察の余地がある。岡村先生の談によれば、本書は光太夫が持ち帰った他の文献と一緒に、幕府の天文方に召し上げられ、さらに蕃書調所に移され、降って静岡学校の蔵書となり、同校の杉山親氏(三八)の手に渡ったという。杉山氏は、のちに開成学校の教師を勤めた人で、慶応元年(一八六五年)に市川文吉ら遣露伝習生の送別会に出席して激励文を送ったこともあり、独語、蘭語からの訳書があり、漢詩にも堪能であった。その後、大正十三年頃に同氏の蔵書が売り立てられ、そのなかに本書が含まれていた。このときに、元香川大学学長で、また早稲田大学で講師を勤められたこともある故神原甚造判事が購求された。神原

氏は、大正十二、三年頃から尾佐竹猛博士、吉野作造博士らとともに明治文化を研究し、資料を蒐められたが、その後ふたび本書は書肆に渡ったのであった。

光太夫の将来品について、新村出博士は、『続南蛮広記』所収「伊勢漂民の事蹟」のなかで、

光太夫が露国から持帰つた地図十枚と器什衣服類は写されて北槎聞路の別巻として今内閣に存する。其他書物若干は官に収められたらうと思ふ。寛政五年十月石川村上の両宣論使帰府の際献じた様である。算術書字学書などが将来書の中にあつた。ゴロニンの幽囚日記に、天文台の学士足立左内が松前出張中ゴロニンの補助により、嘗て光太夫が持帰つた露都刊行の小学校の教科書めいた算術初歩を訳したと出て居るは其一である。

とのべられており、また、龜井高孝氏は、その校訂本『北槎聞路』解説の項に、

これらの衣服、器什、ロシア貨幣並に地図の類の行方はいかがしたであらうか。そのあるものは公儀に召上げられた。しかしそれらは果して幕府の秘庫にそのまゝ收藏されたであらうか。幸にしてそれらが倒幕の後明治政府に委譲されたとすれば帝室博物館或はその他の向に伝へられてゐるかもしれない。しかし幕末の様子を見ると、かうした品物は關係有司の手に渡つて四散した虞がなかなか多いといふ事である。と感慨の一端を洩らされている。龜井氏のいわれるように、光

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

太夫の持ち帰つた品物を入手することは、現在ではきわめて困難である。ところで、標記の由緒ある一本は、光太夫の長期にわたる滞露の際に、いつ、どこで入手したかという問題、本書の随所に見られる墨書の解明、さらに十八世紀末のロシアにおける学制改革初期の教科書としての本書の意義、ゴロヴニン(Василий Михайлович Голубнин)と足立左内との交渉——こうした諸問題をも併せ考えながら、しばらく当時の事蹟やその影響について論じてみたいとおもう。

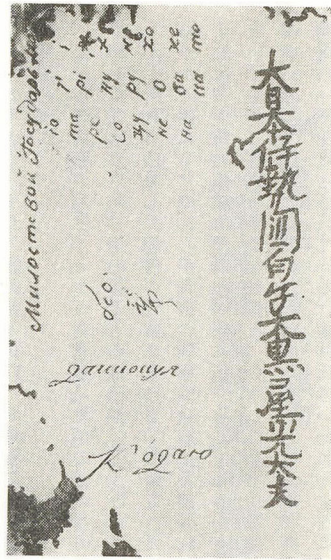
## I 本書の型態と内容をめぐって

順序として、まず本書の大きさからのべると、17 cm × 10 cmで、岩波文庫をやや細長くしたほどの小型本。粗雑な厚手の洋紙に、両面刷で一〇二頁(標題紙・目次・折込内容表などを除く)の皮装本だが、保存はきわめて悪い。背皮は無残に破れ、表紙の角は表裏ともに落ちくぼんだ紙魚だらけのあばた本である。表紙皮装部の左端に、小さく墨書の露字、Дан Ко(大光)、見返しの右側には、一号活字大の漢字で、

大日本伊勢国白子大黒屋光太夫

と明確に墨書され、その左下にも Дан Ко(大光)と露字による自署がある。さらにその左上には、同じ墨蹟で Мисо-Стефанович Голубин(わが親しき殿方へ、の意か。帝制時代にのみ用いられた語句。主として書簡用語で、貴下、もしくは





第一圖 光太夫筆蹟

は拝啓の意味で用いられたが、文法的にいえば *Милостивому Государю моему* とするのが正しいと書かれている。(第一圖参照)これと同じ語句は、巻末一〇二頁の右側空白の部分にも三行にわたって書かれているが、これらの語句の下には、源・久・丞・兵・明・長・庄・拾・百などの漢字が横書きなされ、それぞれが露字で附されているのが注目される。(口絵下圖参照)また、表紙裏の見返しにも、

イ ロ ハ ニ ホ ヘ ト  
チ リ ヌ ル オ ワ カ  
ヨ タ レ ソ ツ ネ ナ

までを露字によって認めてある。

つぎに、見返しの遊び紙の裏面、すなわち標題紙の左側に

は、露字で *Kamei Xio300* とあり、その右下に漢字草書で、

勢州白子若松

龜屋 兵 藏

と認めてある。(口絵上圖参照)これらの露字ならびに漢字の筆蹟はすべて光太夫の自筆で、前掲龜井氏本『北樵聞略』中に示されている、アッシュ二八四・日本図裏の自署と比較すれば一目瞭然である。(第二圖参照)

さて、標題紙左肩と巻末一〇二頁右端には、それぞれ角型の  
[辨 校 校]の朱印があり、九六頁と裏表紙には [神 原 家 図 書 記] の墨

印が押捺されている。以上ながながとのべたけれども、こうした事實は、本書の出所や由来、ことに光太夫がロシアに滞留中の経験を採知する上にきわめて重要なのである。しかし、この点に関しては後章にゆずり、ここでは形態上の紹介にとどめておきたい。なお、本書の標題「Руководство к арифметике для употребления в народных училищах Российской Империи, изданное по высочайшему повелению царствующей Императрицы Екатерины второй. Часть первая. Цена без переплета 15 коп. В Санктпетербурѣ, 1784 года. 是、『女帝エカテリナ二世の勅令により刊行せられたる露西亞帝國国民学校用算術入門書。第一部。装幀別価格十五カヘイク。一七八四年サンクトペテルブルグにて』と直訳される。目次の全文はつぎのとおりである。

序論

1 序説

2 計算一般について

3 数字の記号について

4 数字の音読と記述について

第一章 同種類の整数計算における通常の四種の計算について

1 加法について

2 減法について

3 乘法について

4 除法について

5 検算について

第二章 名数について

1 序説

①貨幣 ②度量 ③衡

2 名数の換算について

3 名数の変化について

4 名数の加法について

5 名数の減法について

6 名数の乘法について

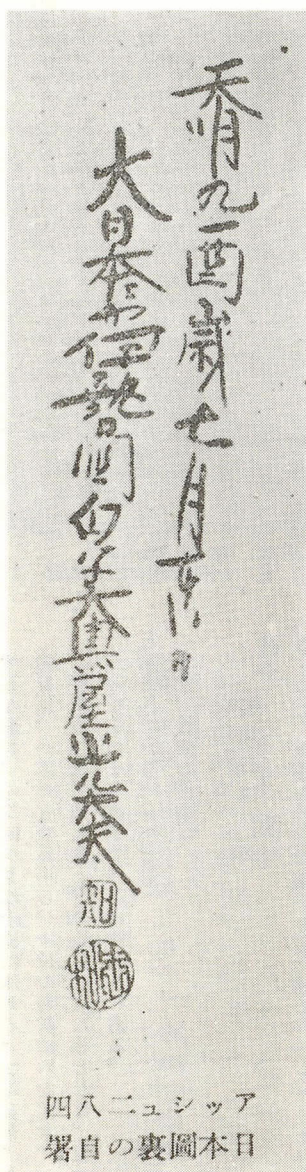
7 名数の除法について

第三章 符号と比例について

1 符号について

2 比例について

3 反比例について

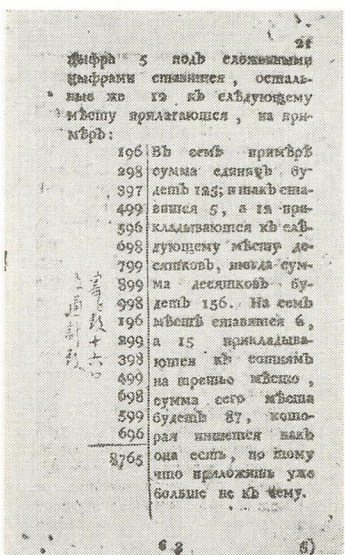


四八二ユシッア  
署自の裏圖本日

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

第二図 日本図裏の光太夫筆蹟





第三図 第一章 加法の項 (和解は足立左内と推定)

さて、右の内容を通覧すると、それは私たちが小学校の低学年で習った算術の初歩とほとんど変わりはない。ところが、各章の例題の傍に、ていねいに小さく切った薄手の和紙がはりつけてある。たとえば、第一章加法の項(二頁)には、「寄七数十六口及通計數」、同乗法の項(三四頁)には、「三五七ニ四ツ掛テ一四二八ヲ得テ一行ニ記シ又二ヲ掛テ一行ニ記シ又一ヲ掛テ一行ニ記シ 三行合ヌル數即上數相乗數也」のごとく、それぞれ墨書による和解が美しい楷書で記入されている。前者の例題は、

196  
298  
397  
499  
596  
698  
799  
899  
998  
196  
399  
499  
599  
696  
8765

で、この解説(原書)を訳すと、

この例において、一位の総計は一二五となる。従つて、ま

ず五を置き、一二はつぎの十位に加える。このとき、十位の総計は、一五六となるから、十位の場所に六を置き、一五を三番目の百位に加えると、その総計は八七七となる。従つて、八七をそのまま書き並べればおわりである。

と記されている。(第三図参照)

357  
124  
1428  
714  
357  
44268

また、後者の例題は、  
であるが、この解説は前掲の和解文と大体等しいので省略する。こうした和解は、筆蹟から判断しても明らかに光太夫の書いたものではなく、「まえがき」で新村博士の文章を引いてのべたとおり、足立左内(信頭)が松前出張中に、ゴロヴニンの助力によって訳したときの筆蹟に相違ないとおもう。左内の筆蹟は未見に属するが、天文方に勤めた科学者にふさわしく、かなり緻密な書体である。

ところで、多少余談にわたるけれども、小倉金之助博士の『近代日本の数学』所収の「日本数学史上の奇蹟——柳河春三の掛け算」と題する論考を拝見すると、非常におもしろいことが書いてある。たとえば、前掲の例によつて示すと、

357  
×124  
1428  
714  
357  
44268  
(A型)  
↓  
357×4  
357×2  
+357×1  
44268

は、私たちが小学校で習った方法だが、他に、

$357 \times 124$	$357 \times 124$	$357 \times 124$
<u>372</u>	<u>357</u>	<u>868</u>
620	714	620
<u>868</u>	<u>1428</u>	<u>372</u>
44268	44268	44268
(D型)	(C型)	(B型)
↓	↓	↓
$300 \times 124$	$357 \times 100$	$7 \times 124$
$50 \times 124$	$357 \times 20$	$5 \times 124$
+ $7 \times 124$	+ $357 \times 4$	+ $3 \times 124$
<u>44268</u>	<u>44268</u>	<u>44268</u>

などの方法があり、日本でも安政四年（一八五七年）刊の柳河春三著『洋算用法初篇』における掛け算は、B型とD型のみで、普通のA型は全く見られない由である。小倉博士の説によれば、A型は単に習慣上の問題で、合理的なのは、B・C・D型であるゆえんを詳述されている。しかし、ドイツとオーストリアの小学校教科書では、C型がA型と併用されている由で、基本はやはりA型のものである。とすれば、エカテリナ二世時代のロシアの算術は、ドイツの一公国だったオーストリアの影響を受けて、A型を採用していることがわかる。事実、エカテリナ時代の学制改革が、主としてドイツ、とくにオーストリアの学制に従って実施されたことは、史実の伝えるところであ

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

り、しかも光太夫将来の算術入門書は、その代表的な一本であることにおいてもまた不朽の史料の意義をもっている。

ついでながら、ロシアの算術は、その後著しい進歩を示している。私には、専門的知識がないので皆目わからないけれども中村清二博士は、「ロシアの農民の掛け算」（朝比奈貞一博士著『和蘭の涙とポロニアの徳利』所収）と題する随筆において、まことに興味ある乗法を紹介されている。従って、ふたたび既述の例題によってその方法を試してみよう。

いま、三五七に一二四を乗ずる場合、まず乗数一二四を順々に二で除する。ただし、この計算で〇・五が出れば、すべて切り捨てる。切り捨てる理由は、百姓にはそんな半端ものは面倒だから捨てるのださうである。とにかく割れるだけ割って一になればやめる。つぎに別行において、被乗数三五七に順々に二を乗じ、一二四を二で割って一に至る回数と同じ回数まで続ける。さて、両者の列を対応して並べると、つぎの計算表がえられる。

被乗数	乗数	各計算回数
357 (×2)	124 (÷2)	
714	62	1
1428	31	2
2856	15	3
5712	7	4
11424	3	5
22848	1	6

この総和  
が答

1428
2856
5712
11424
+ 22848
<u>44268</u>



[ПУД.] [ФУНТ.] [РУБ.] [КОП.] [ФУНТ.] [ЛОТ.] [РУБ.] [КОП.]  
 PUD. FUNT. RUB. KOR. FUNT. LOT. RUB. KOR.

1	— 25 :	41 — 60 =	30 — 24 :	19 — 68
40		×) 100	×) 32	
+ ) 25		4100	60	
65		+ ) 60	90	
×) 32		4160	960	
130			×) 24	
195			984	
2080				

280	:	4160	= 984	:
			×) 4160	
			59040	
			984	
			3936	
		2080	4093440	(1968
			208	
			2013	
			1872	
			1414	
			1248	
			1664	
			1664	
			""/"/"/"	

さらに、この表のなかで、乗数列のなかにある偶数に対応する被乗数列の数（すなわち、六二にたいする七一四）を除外して、被乗数列の他のすべての数を加えると答えがえられる。右の方法は、不幸にして九九のみこめないロシアの農民の

ために考案された計算法らしいが、その原理はなかなか高度なもので、朝比奈博士の前掲書もしくは「自然科学と博物館」（十一巻八号）所収の中村博士の一文を参看されるならば、代数の二進法にもとづく方式であることが理解されよう。中村博士は、人から聞いた話で真偽のほどは知らないが、右の計算方式は、どうしてロシアの農民どころではない、すぐれた学者が考えた結果に相違ないと確言されている。

おわりに、算術入門書の第三章「比例」の項（九六頁）から、足立左内の和解のない例題（和解は、第一章までで第二章以下には附されていない）をひとつだけ紹介しておこう。（上段数式参照）

この例題の解説はいたって簡単である。

すなわち、第一項の一プードをフントに換算して、それに二五フントフを加えた総計をロートに換算すると、二〇八〇ロートフとなる。同様に、第三項もロートに換算し、第二項はカペイカに換算する。つぎに、第二項の換算数を第三項の換算数に乗じて、その結果を第一項の換算数で除するならば、一九六八カペイエク、すなわち、一九ルブレイ六八カペイエクとなり、比例式が証明される（プード・フント・ロートは、いずれもロシアの重量単位である。また、ルーブル・カペイカは貨幣単位である。フントフ・ロートフ・ルブレイ・カペイエクは、文法上の変化、複数生格を示す語尾変化で、フ

ト・ロート・ルーブル・カベイカと同じ単位である。同類の単位における換算上の相関関係は、例題の計算式を見れば一目瞭然である。なお、重量単位のロートは、現在では用いられていない。

## II 露都に光太夫の学校参観と本書との関係

光太夫が、露都ペテルブルグに滞留した期間は約九ヵ月、すなわち、一七九一年(寛政元年)露曆二月十九日より十一月二十六日までである。この間の光太夫の貴重な体験は、同年五月二十八日、ツァールスコエ・セロ(Царское село—皇帝村)における女帝エカテリナ二世との謁見を中心として華々しく展開される。詳細は、『北樵聞略』『北樵異聞』その他の文献、最近では鮎澤信太郎博士の『漂流』(日本歴史新書)などにゆずり、ここでは標記の關係事項のみを追求してみよう。

まず、光太夫の学校参観について、『北樵聞略』巻之七所収「学校」の項(龜井氏本)にはつぎのように伝えている(一)内は筆者注。

学校をウチテリドモ〔ウチーチエリスイ・ドーム、учительный дом—学習館の意。廢語〕といふ。ペートルブルグ「ペテルブルグ—Перебыт」に四所あり。其一はバンカ〔バンク—Банк〕の銀出入の役所也の對門むかひにあり、都講〔校長〕はイワンイワノヴィチコーハ〔イワン・イワノヴィッチ・コッホ

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

—Иван Иванович Кох〕官はボニコルニカ〔バルコフニコ、полковник—帝制時代の七等官。大佐相当官で四頭立馬車に駕する階位〕なり、屋は横七十間縦三十間計にて三層に建、下層は商人にかし置、第二層を五房に隔て生徒を置、第三層を二つに分ち一分を三房にしきりて生徒をおき、一分はコーハ住居なり。コーハはネメツ〔ドイツ人—Немец〕人にて文学算数及び諸国の言語文字に通しもつとも博洽の学士なり。此外二処は都講ステツパノポリシヨレヴィチスツルゴラシコーフ〔スチエパン・ポリシヨレヴィッチ・ストウルゴフシチコフ—(Степан Большоревич Струговников)〕官はボニコルニカ〔前出〕なり。此三所は皆平人を教育する所にて、農工商賈の輩みな此学に入なり。官人〔軍人〕を教育する都講は、ガラフヒョードロアスタヘウイチアンガリタ〔フョードル・グスターウオヴィッチ・アンハルト伯爵—Граф Фёдор Юсганович Ангарь〕官はエネラルポロツチク〔ゲネラルレパーチク、генерал-поручик—帝制時代の三等官。中将相当官で六頭立馬車に駕する階位〕にて第三等の高官なり。学校は此方の一丁に一丁半計りの構にてもつとも壯麗なり。すべての学校のうち飲食調度までも常の居所よりも勝り、よるづに事のかげざる様に設け、洗面淨手の湯などは大甕おほいせにてたへず焚おき、かまの腹にのみ口を仕かけ、栓をぬき盥にうけて用るなり。臥床は両側に一連に排へて甚見事なりとぞ。また内に飯山泉水いひやまを造る。是は幼稚の生



徒等遊息のために設たるなり。幼稚の者をば老女をおきて撫育せしめ、日毎に刻限ありて鐘をならせばもつとも幼少なるものを先にして十人毎に老女一人つづ附添、五十人を一隊にして半時宛遊するなり。又寺一座あり、是は七日毎の祭日に生徒を外に出さず、此寺に行て仏を拝せしむ。此学校はエネラル〔ゲネラル、генерал—将官〕よりクラポツシキ〔プラーボルシチク、преподачик—帝制時代の十四等官。少尉補相当官で二頭立馬車に駕する階位〕までの官人の子弟を教育する学校なり。此外にワシレイラストロワ〔ワシリエフスキー・オーストロフ、Васильевский остров—ペテルブルグのネヴァ河北部の区域〕にセリザント〔セルジャント、сержант—軍曹〕、ウインゼノアキリチェリ〔ウンテルリイアフィツェール、унтер-офицер—下士官〕、カプラン〔カプラール、капитан—伍長〕、ソーダテ〔サルダート、солдат—兵卒〕、カザカ〔コサック—カザク〕等の学校あるよしなれども光太夫ゆきても見ざりし故如何様成光景とも知ざるよし、總じて学校に入ものは五年の間は衣食ともに官より給はる也。学校の内には膏文学のみならず百芸の師範を備へおき、生徒の好む処に随て学ばしむ。月々の<sup>こもり</sup>尽日毎に考試あり、是は其学校の教師の前にて試るなり。年々十一月の末に諸学士会合して考試し、学芸工芸ともに業の進たる者をば席を進め、官版の書一部を給はる。進まざる者をば席を退け、甚しき怠慢の者には罰杖あり。また業の成たる者にはそれぞ

れに官職を授けらる。此学校の費用もつとも夥しき事なりとぞ。右之外諸方の窮郷<sup>たたら</sup>小部落といへともおのく学校を設け、習業怠る事なしといふ。

つぎに、右の光太夫の報告を補足して、当時の学制改革期の実状、ならびに光太夫と算術入門書との有機的関連を推察してみよう。主たる参考文献は、エヌ・ア・コンスタンチノフ〔H. A. Константинов〕と、ヴェ・ヤ・ストゥルミンスキー〔B. Я. Струмлинский〕両教授の『ロシア初等教育史概説』（Очерки по истории начального образования в России. 2. изд. Москва, 1953）および、ソビエト科学アカデミー歴史研究所刊『レニングラード史概説・第一卷』（АН СССР. Институт истории: Очерки по истории Ленинграда. Том 1, Период феодализма 1703-1861 гг. Москва и Ленинград, 1955）である。これらの文献は、エカテリナ時代の学校教育の沿革に関するかぎりでは、クリュチエフスキー教授（Василий Осипович Ключевский）や、エール大学のヴェルナドスキー教授（George Vernadsky）の代表的なロシア史関係書よりもはるかに詳細であり、また広範な視野をもっている。

さて、初期のモスクワ国家における宗教的な教育を、西欧風に改革しようとする積極的のり出したのは、英主ビョートル大帝（Петр I）であった。一七〇一年（元禄十四年）に数学航海学校が創設され、一七一四年（正徳四年）には貴族子弟の義務教育令が發布された。さらに若干の技術学校が相ついで建てら

れ、一七三二年（享保十七年）、アンナ・イワノヴナ女帝（Anna Ivanovna）の治世（一七三〇～一七四〇）に、ペテルブルグのワシリエフスキー・オーストロフにあるメンシコフ侯（Князь Александр Д. Мещников）旧邸に陸軍士官学校（幼年学校を含む）が開かれた。生徒は貴族の子弟に限られていたが、ここでは専門的な軍事教育ではなく、一般教養科目にも力が注がれていた点で、ピョートル大帝時代の軍人養成主義の諸学校とはかなり趣を異にしている。すなわち、数学・砲術・築城・フェンシング・乗馬などのほかに、ドイツ語やフランス語などの外国語・歴史・地理・法律・舞踊・音楽などを生徒の個性に応じて習得させ、必修の教養科目は神学と算術であった。劇作家のステロコフ（Александр Петрович Суварков）や、詩人ヘラスコフ（Михаил Матвеевич Херасков）などを輩出したこの士官学校を、人びとは「騎士のアカデミー」（Парская академия）と呼び親しんでいたという。

こうした傾向はしだいに強調されて、十八世紀末のエカテリナ二世の治世には、ロシアにおける国民教育が基礎づけられるにいたった。士官学校における軍事教育も、下級クラスではすでに一般教養が主体となり、上級クラスでも専門的な軍事科目と並行して、「市民としての教養」が重視され、「健康な人間を養成し、情操と知性を練磨し、立派な市民となること」を主眼としていた。エカテリナ朝の文人グリム（Friedrich Melchior Grimm）は、女帝にドイツの学制をすすめ、また、学士院会員

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

エビヌス（Франц Ульрих Теодор Эпинус）は、オーストリアの学制をすすめた。啓蒙君主として広く文学・美術・学術・教育の各分野における社会教化に専念した女帝は、つとにヴォルテール（François Marie Arouet de Voltaire）や、デイドロー（Denis Diderot）などの啓蒙思想家と文通し、ペテルブルグやモスクワの社交界にはフランスのサロンが移入され、貴族階級の間ではフランス語が語られ、フランス書が流行して、ロシア上空前の華やかな宮廷・貴族時代が出現したのであった。外来文化にたいする強烈的なエキゾチズムは、西欧貴族社会への自由主義的崇拜となって発散し、一方ではまた、東方の未知なる国々への探求心を刺激したのである。従って、露都における日本の漂流光太夫一行にたいするエカテリナ女帝以下、政府高官、学者、教育家連中の異常な執心が、『北樺開略』の随所に散見されるのも決してゆえなきことではない。鎖国時代の海外へ漂流した日本人は多いが、光太夫のように恵まれた待遇を受け、いわば国賓なみに扱われた漂流民の例は、幕末にアメリカへ漂流した彦蔵（ジョセフ・ヒコ）を除けば、わが国史上、他に見出だし難いようにおもわれる。それはひとつには、光太夫自身、人格、識見ともに具備した知識人であったということ、さらには当代のペテルブルグが、東方の珍奇な客人を遇するにふさわしい自由な雰囲気にもちていたことなどによるものである。光太夫によってもたらされたロシアの国情は、封建日本の先覚者たちにとって稀有の刺激になったばかりでは



なく、その結果まとめられた『北槎聞略』その他の文献は、今日においてもロシア史研究上の参考資料として役立つている。論をもどして、一七八〇年(安永九年)に、オーストリアの皇帝ジョセフ二世(Joseph II)とモギリョフ(Mogilev)小ロシアの都市)で会見したエカテリナ女帝は、その際にハンガリアの学制改革を遂行した有名な教育改革者、ヤンコヴィッチ・デ・ミリエヴォ(Theodor Jankevitch de Miriewo)を引見



第四図 ヤンコヴィッチ・デ・ミリエヴォ

した。ヤンコヴィッチのロシア到着後、一七八二年(天明二年)九月七日に、「初等教育施設委員会」を設置する勅令が公布され、委員長には元老院のザヴァドフスキー(Лерп. Васильевич Заваловский)、委員として学士院会員のエピヌスと秘書官バストーホフ(П. И. Пастухов)が任命された。ヤンコヴィッチは、エカテリナ女帝の治世には委員にはならなかったが顧問として参与した。ヤンコヴィッチは、初等教育制度を確立する

した。(第四図参照)

ヤンコヴィッチはセルビア人でギリシア正教徒であり、ロシア語も自由に話せたので、エカテリナ女帝は即座に彼をロシアに招聘することに

ために、同年九月二十七日に「ロシア帝国内における国民学校設置案」を上申したが、さらに具体的な方針を樹立すべく、ロシアの教育上の伝統に明るく、また新たな教科書や教授資料の編纂に適した協力者を必要とした。ヤンコヴィッチは、オーストリア新学制派に属するスラヴ系のすぐれた教育家ヤン・アモス・コメンスキー(Ян Амос Коменский)の基本的見解に賛同していたが、さらに実務上の協力者として多くの有能な人びとを集めた。この間の詳細な事情は、従来のロシアの教育史文献にはほとんど明らかにされていないけれども、ヤンコヴィッチの補佐役として、コヴァレフスキー(Ковалевский)——ロシア最初の教授法入門書を編纂)、学士院附属中学校教師スヴェトロフ(Светлов)——ロシア語変化全表を編纂)、国民学校視学ストウルゴフシチコフ(Струговичков)——『北槎聞略』に、「都講ステツパノポリシヨレヴィチスツルゴラシコフ、官はポニコルニカなり」と見える)、ペテルブルグ国民学校校長コゾダヴレフ(Козодавлев)、教師スイレイチコフ(Сарейчиков)などが直接に参与していたことは明らかである。これらの補佐役連は、ヤンコヴィッチが開講した教員セミナーイで新教育の方法論を検討した。ヤンコヴィッチは、学士院におけるロモノソフ(Михаил Васильевич Ломоносов)のロシア語および歴史に関する業績を重視し、またモスクワ大学の指導的役割に着目した。モスクワ大学には、ロモノソフの弟子だった多くの教授——文学・哲学のポポフスキー(Николай Никитавич

Половский) も、とも主要な教科書を編纂したバルソフ (Барсов) 、デモクラシーを擁護するデスニーツキー (Семен Ефимович Десницкий) およびマニーチヨフ (Дмитрий Сергеевич Аничков) 、クロウイン (М. Е. Коровин) 、ヤホフ (А. А. Бар) 、シチュエリツテル (И. Г. Штурмер) その他 の権威が指導的地位を占めていた。従って、ヤンコヴィツチの 学制改革の活動が、学士院とモスクワ大学とを重要な基盤とし ていたことは明らかである。

ヤンコヴィツチの原案では、国民学校はつぎの三種類の学習 課程を、相互の密接な関連のもとに遂行すべきであるとされて いた。

- 一、小学校 (Малые училища) — 二学級制
- 二、中学校 (Средние училища) — 三学級制
- 三、本校 (Главные училища) — 四学級制

右の区分は、小学校、中学校、本校と順次に進学するのでは なく、並列に置いた区分である。従って、各学校の第一学年級 は同水準で、小学校は二年教育、中学校は三年教育、本校は四 年教育と、教育期間に相違があるわけで、学習水準は、小学校 の二年級は中学校の二年級に、中学校の三年級は本校の三年級 に相当する。しかし、実際には、小学校と本校だけがまずペテ ルブルグ管内で実施され、三年制の中学校は設置されなかつた。一七八三年 (天明三年) に、ヤンコヴィツチは国民学校本

『露国民学校用算術入門書』をめぐって

校 (Главный народный училищ) の校長に就任した。一七 八五年 (天明五年) には、ペテルブルグの学童数は一一九二名 に達し、翌一七八六年 (天明六年) には、エカテリナ女帝の勅 令によって、二五の諸県に国民学校本校が開設された。これら の四年制の本校では、各学年においてつぎの課目を修得するこ とが制定されていた。

第一学年級 — 母国語 (ロシア語) のアルファベット・読 解・作文・簡略聖書問答・教会史

第二学年級 — キリスト教典と使徒行伝・詳細聖書問答・ 市民道德書・算術第一部・ロシア語文法規 則・作文・習字・図画

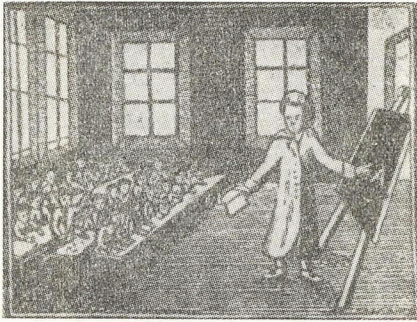
第三学年級 — 聖書研究・高等聖書問答・算術第二部・一 般歴史第一部・一般歴史序説・ロシア地誌・ ロシア語文法演習・図画

第四学年級 — ロシア語文法演習・実用文演習・ロシア史・ ロシア地理・数学・幾何学初歩・工学・物 理学・博物学・建築 (製図)

以上が国民学校本校の教育課程目であるが、このほかに本校だ けでは不足な県と諸郡には、二年制の小学校が設置された。小 学校では、本校の第二学年級までの課程のほかに、ラテン語そ の他の外国語が加えられ、算術は第一部と第二部の課程をすべ て習得することになっていた。なお、フランス語は、エカテリ



ナ女帝の意向により、フランス革命による自由思想を扇動する危険な言葉として外国語から除外され、代わりに合法的な言語、すなわちシベリアでは中国語、南ロシアではギリシア語が加えられた。全般的には、ロシア語・タタール語・ラテン語・古代ギリシア語などの諸言語がそれぞれの目的から教授された。この傾向は、小学校だけでなく、国民学校本校においても同様であった。これらの国民学校では、学童は毎朝登校前に顔と手を洗い、調髪し、必要ならば爪を切るように躡けられていた。朝の礼拝を行ない、教科書、ノート、ペン、清書用黒板を手にして定刻までに登校しなければなら



第五図 18世紀ロシアの小学校

なかつた。授業は、冬季は午前八時から十一時、午後三時から四時までの五時間制、夏季は午前七時から十時、午後二時から五時までの六時間制であった。(第五図参照)

ヤンコヴィッチは、学士院およびモスクワ大学の多くの協力者の力を結集して、国民学校用教科書や教材を制定して世に送

った。その主なものを列挙するとつぎのとおりである。

- 一、教会用および一般市民印刷用のアルファベット一覧表 (一七八二年)
- 二、初等読本 (一七八二年)
- 三、習字手本 (一七八二年)
- 四、簡略聖書問答書 (一七八二年)
- 五、学童心得 (一七八二年)
- 六、高等聖書問答書 (一七八二年)
- 七、教会史 (一七八三年)
- 八、ロシア帝国国民学校第一・第二学年教師用入門書 (一七八三年)
- 九、国民学校読本用一般市民心得 (一七八三年)
- 一〇、世界史教科書 (一七八四年)
- 一一、ロシア史概説 (一七八四年)
- 一二、算術入門書 (一七八二・八四年)
- 一三、ヤン・アモス・コメンスキの『目に見える世界』からの抜萃改稿篇『宇宙の眺め』(ラテン語・ロシア語・ドイツ語の各版)
- 一四、工学入門書 (一七八六年)
- 一五、ロシア帝国地誌概要 (一七八七年)
- 一六、ロシア帝国地誌詳説 (一七八七年)
- 一七、天体地理学入門書 (一七八七年)

一八、国民学校用博物学概要（一七八六年）

一九、幾何学入門書（一七八七年）

二〇、物理学入門書（一七八七年）

以上の教科書類は、すべてヤンコヴィッチが監修したもので、このほか地図・地球儀・地図帖その他の学習教材を制定した。右のなかで、第十二番目にある算術入門書（一七八二〜八四年）は、Руководство по арифметике なる標題ならびに刊年において、光太夫の持ち帰った算術入門書と一致している

西 曆	学校数	教師数	生徒数（女子）
1781	7	—	485（—）
1785	12	38	1491（209）
1786	165	394	11088（858）
1800	315	790	19915（1787）

〈第1表〉 18世紀ロシアの国民学校の膨脹

階 級 別	百分比%
コサック・外国人子弟	4
僧職子弟	2
郷土・農民子弟	5
下級官吏・雑階級子弟	8
農奴・下僕子弟	11
兵卒子弟	11
商人子弟	12
市民（町民）子弟	14
貴族子弟	33

〈第2表〉 1801年の国民学校学童階級別比率

から、まさしくヤンコヴィッチ監修のロシア学制改革初期の記念すべき一本であり、国民学校第二学年級用の教科書であることが考証される。ちなみに、ロシア国内における国民学校の新設状況（第1表）と学童の階級別比率（第2表）を掲げるとつぎのとおりである。

さらに重要なことは、一七八三年（天明三年）に、ペテルブルグの国民学校本校内に国民学校のための師範学校が併設され、数学・物理・博物・建築・製図・ロシア語・ラテン語・ドイツ語などが教授されたことである。師範学校の上級の二クラスは、学士院の教授や助教、たとえばズーエフ（Василий Федорович Зуев）やコロヴィン（前出）などの一流の学者が講義した。下級のクラスはセミナリイを主体とした一般教養クラスで、随時上級クラスの講義も聴講できる仕組みになっていた。師範学校は、研究室や図書室が完備し、ここから送り出された教師たちは、一七九二年（寛政四年）には、ペテルブルグにおいて、三一八名の男生徒と五二二名の女生徒を教育していた。このほかに外国人経営の私立学校もペテルブルグに数カ所あった。ヴェルナドスキー教授は、これらの現象を総括して「十八世紀におけるロシア文化の還俗」と表現し、新教育制度の重要な史的段階であることを指摘している。



ところで、光太夫が最初に参観したと推定される学校、すなわち「パンカの対門」にあり、都講はイワンイワノヴィチコーハ、云々」は、前掲書『レニングラード史概説』所収のペテルブルグ市地図（一七九二年版）によれば、ネヴァ河南部の官庁中心街、アドミラルルチェイスキー区（Адмиралтейский）内に、二カ所に銀行が存在し、その一銀行の傍に、一七八三年（天明三年）創立の国民学校のための師範学校が示されている。博洽の学士、ドイツ人イワン・イワノヴィッチ・コッホを学長とする学校というのは、右の師範学校であろうと推測される。イワン・イワノヴィッチという呼称は、ドイツ名のヨハンをロシア風に呼んだわけで、こうした例は多いから別段奇とするには当たらない。光太夫ですら「幸太夫イワノヴィッチ」などと呼ばれたこともあった。ただ、ここで問題になるのは、既述のように、師範学校は、一七八六年（天明六年）以降は国民学校本校から分離し、校長もヤンコヴィッチに代わってゴゾダブレフが就任しているが、光太夫が参観した際には、さらに変遷があつて三代目の校長コッホになつていたのかもしれないということである。しかし、コッホが校長を勤めた事実については、筆者が参観したロシア側の文献には見当たらないので、光太夫の陳述がまったく正しいとは断定しかねる。さらに考えられることは、光太夫がラクスマンと帰国する際に、オホーツクの長官代理をつとめた人物に、文官少佐イワン・コッホ（Иван Кох）なる者がいて、その子息で十五才の少年ワシーリー・コ

ッホ（Василий Иванович Кох）が自費でラクスマン一行に随行した事実が、『ポロンスキー（А. С. Попонский）の記述（一八九一年。駐露日本公使館訳・林欽吾補註『ロシア人日本遠征記』昭和二八年刊参照）に見えるので、あるいは光太夫が混同して陳述したのかもしれない。しかし、師範学校長は七等文官、大佐相当官であるから、オホーツク長官代理の文官少佐イワン・コッホとは同一人物ではないであろう。いづれにせよ、問題の一七八四年刊『露国民学校用算術入門書』は、おそらく右のアドミラルルチェイスキー区の師範学校で入手したものではなからうか。学士院正会員、化学者のラクスマン教授（Кирилл Григорьевич Такман）を通して紹介された光太夫が、いわば日本の知識人として露都の人士に遇されていたことは周知のとおりであり、従つて、ヤンコヴィッチ制定の教科書は、学校参観者たる東方の珍客にとつて、うつつの贈り物であつたと推察される。では、なにゆえに算術入門書が選ばれたかを推論するならば、これも決して偶然ではなからうとおもう。ひとつには、露都滞在中の光太夫にとつて、計数の初歩をマスターすることが不可欠であつたために進んで所望したということ、また、ひとつには学校側で気をきかせて、珍客の不便を補なうべく故意に算術入門書を選んで贈呈したこと——以上のいずれかであろうと考えられる。光太夫が、「ミーロスチェヴォイ・ガスダリー・マエムウ」（わが親しき殿方へ）という語句を幾度も本書に墨書しているのは、贈呈された際のロシア

風のあいさつの言葉として感銘したためであろうか。また、拾、百、千、などの数字も、本書によって正しい書き方や読み方を会得した形跡を示すものではないかとおもう。

さて、右の師範学校のつぎに参観したのは、「此外二処は都講ステツパノポリシヨレヴィチスツルゴランコフ」の学校だが、ストウルゴフシチコフが国民学校視学 (Надзиратель народных училищ) であったことは、前掲書『ロシア初等教育史概説』にも見え、少なくとも、二校以上の視学をつとめていた点では光太夫の陳述と一致している。ただし、光太夫の参観した学校の所在は判然としていない。

さらに光太夫は、「官人を教育する都講は、ガラフヒョードロアスタヘウイチアンガリタ、云々」の学校を参観している。右の、伯爵フョードル・グスターヴオヴィツチ・アンハルトは、エカテリナ女帝の出たアンハルト公一族のウイルヘルム・ギュスターヴ・アンハルト伯爵 (Wilhelm Gustav Anhalt) の第四子フリードリッヒ (Friedrich) のことである。一七三二年ドイツに生まれ、一七八三年以降ロシア陸軍に勤務し、陸軍中将近衛副官、軍令部総監の地位にあった。一七八七年、エカテリナ女帝の勅令により、陸軍貴族士官学校 (一七三二年創立) の学長を拝命、その理想主義的道德教育は、ペテルブルグにおける教育の黄金時代を築きあげたと称せられている。ロシア名および父称は、フョードル・フョードロヴィツチ (Федор Федорович) または、フョードル・グスターヴオヴィツチ (Федор

『露国国民学校用算術入門書』をめくって

Густавович) で、一七九四年 (寛政六年) に没した。

右のとおり、光太夫が参観した「官人を教育する」学校とは、アンハルト伯を学長とする陸軍貴族士官学校に相違ない。しかし、光太夫がペテルブルグに滞在していた当時には、陸軍士官学校は二、三の分校を併設していることが、既述のペテルブルグ市地図によって明らかなので、本校 (ワシリエフスキー・オストロフ区内) 以外のいずれかの分校を見学したわけである。なぜならば、光太夫は、ワシリエフスキー・オストロフでは、遊廓や刑務所を見学しているが、学校を参観した形跡は見出だせないからである。では、分校とは一体どこであるかを推論するならば、光太夫の陳述から考えて、おそらくアドミラルチエイスキー区内に存在した陸軍幼年学校であろう。「幼稚の生徒等遊息のために」庭園や池が設けられているというのは、陸軍幼年学校の教育が、ごく幼い世代から基礎教育を施していたことを示すものと考えられる。従って、軍人高官をめざす貴族の子弟は、いずれも国民学校には進学せず、幼年学校から士官学校への一貫したコースを歩んだものと思われる。なお、アンハルト学長については、『北樺聞略』巻之九所収「雑載」の項にもつぎのように述べてある。(一)内は著者注

又ある時学士ヒョードロアスタペウイチアンガリタより光太夫に 日本ニの服をもちて学校に参るべしと云趣たり。其頃は小袖三つ、袷羽織、綿入羽おり、佩刀こ一こ把こもち居し故、キリロキリール・ラクスマン——Кирилл Григорьевич



Лаксман——化学者、学士院正会員で、第一回遣日使節アダム・ラクスマンの父」とでもない右の品々をとりもたせ行ければ、先 日本 の服に改させ、高き台に登らしめ、アングリタ、キリロおなしく台に登り、その下に学寮の児童等をはじめ諸生残らず呼集め、台本の人を見るへしとてキリロ訳を伝へ、此方の風俗などを生徒等に語り聞せしとぞ。此学校に万国寄語の書あり。部を分ちて 日本語をも載たり。何れも語の末に、之事く〜と書す。たとへば鼻を鼻の事、耳を耳の事、といふがごとし。これは以前此方より漂流せし者共に問て記せしよし。かの問たる時にそれは何の事、かれはこの事と答へたるを、直に之事までを一語と心得てかく記しおきしなるべし。この書を光太夫に翻定すべきよしを望まれける故、日々に通ひて六日にして卒業す。書中の語多く南部辺の言葉にて、しかも下賤の語多し。古来皇朝より彼地に漂流せし事此度共に四度なり。以前の三度はみな南部の人なりしとぞ。日本通事〔通訳〕は今イルコツカ〔イルクーツク——*Иркутск*〕に三人あり。今度光太夫を送り来りしエゴロ〔エゴール・トゥゴルコフ——*Егор Иванович Туголуков*〕——イルクーツク日本語学校出身の通訳〕もイルコツカの人にて言語は南部訛のしかも誤り伝へたる事も多かりし故、初のはどは聞へざる事のみなりしとぞ。光太夫へ右の書校正の謝礼にとて、葡萄酒、覆盆子酒、柑酒おのおの一陶〔砂糖二大塊贈りしとなり。〕

右の文中に、光太夫が『万国寄語』なる書物に収録されている南部訛りの日本語を訂正したことが見えるが、これは、エカテリナ女帝欽定の『全世界言語および方言比較辞典』（第一巻一七八七年刊、第二巻一七八九年刊、第三巻は未刊に終わる。タイトルは、*Linguarum Totius Orbis Vocabularia Comparativa*、*Сравнительные словари всех языков и наречий, собранные десницею Высочайшей особы.*) のごとく、学士院正会員バルラス（*Петр-Симон Паллас*）によって刊行されたロシア言語学史上の古典的辞書となっている。本書の第一巻には、ヨーロッパ語五一、アジア語一四九——都合二百の言語が収録されていたが、その後の改訂版第四巻には、日本語が二八二語含まれているという。これらのアジア語のなかに南部訛りの日本語が混入していたのであろう。一七九一年（寛政三年）に、折よくベテルブルグに居合わせた光太夫にこれを訂正させたのは、前述のヤンコヴィッチであった。このことは、新村出博士が、前掲書『続南蛮広記』のなかで、アーデルング（*Johann Christoph Adelung*）の『博言集』（*Methodisches, oder Allgemeines Sprachens-kunde*）巻四（*Faithel*——*J. S. Vater* の増訂本。一八一七年刊）によって指摘されている。また、バルトリド教授（*Василий Владимирович Бартольд*）の労作『東洋研究史』（*История изучения Востока в Европе и России*。2 版。Ленинград, 1925）にも、バルラスの辞典を増補改訂したのは、ヤンコヴィッチ・デ

ミリエヴォであると明記しているので、アーデルングの記録は正しいものと考えられる。ただし、バルトリド教授は辞典の訂正について光太夫のことにはふれていない。

論が前後するけれども、ふたたび問題の『国民学校用算術入門書』にもどって、本書の表紙裏余白に見られる一見落書きのような光太夫の筆蹟、すなわち源・久・丞・兵・明・長・庄の漢字と、これらの露字による発音表示、さらに、イロハニホヘト……を同様に露字で示している事実を想起していただきたい。算術入門書とはまったく関係のないこれらの筆蹟は、一体何を物語るのでしょうか。筆者は、これらの文字は、光太夫が『万国寄語』すなわち『全世界言語および方言比較辞典』における日本語の訛りを訂正するに際して、ロシア人に正しい発音を示すために、露字をもって示したのではないかと考える。しかし、折角の贈り物を手帳代わりにするとは考えられないとの反駁を想定して、筆者はさらにつぎのような推察を加えてみる。すなわち、光太夫がエカテリナ号で帰航中に、通訳トヴォルコフ、もしくはオホーツク長官代理の子息ワシーリイ・コックホなどに、日本語や日本人名を教授したり、また彼らからは数字の読み方や書き方、算術の初歩について手ほどきを受けたという、いわば船中つれづれなるままの手すさびの筆蹟とも考えられないこともない。

おわりに、やはり光太夫の筆蹟である「勢州白子若松 龜屋兵藏」なる人物について一言するならば、兵藏という名前の者

『露国民学校用算術入門書』をめくって

は伊勢灘民中には見当たらないので、これは庄藏もしくは新藏の誤記ではあるまいかとおもう。Kizoo の音 (Kizoozo) から考えると、むしろ庄藏に近い。新藏と、足の病気に罹っていた庄藏の二人は、イルクーツクで今生の別れを告げて彼地に残留し、庄藏はフョードル・シトニコフ (Федор Ситников)、新藏はニコライ・コロトワイギン (Николай Петрович Колтыгин) と改名している。庄藏は間もなく死亡したが、新藏はイルクーツクの日本語学校教師となり、ドイツの有名な言語学者クラブロート (Heinrich Julius Klapproth) が彼から日本語を学んで、林子平の『三國通覧図説』を翻訳している。また、一八一七年 (文化十四年) に、『日本および日本の商業について、或いは、日本調島の最新なる歴史地理的記述、日本生れの参事会員ニコライ・コロトワイギンにより考究され、イワン・ミルレル刊行す』(О Японии и японской торговле; или, Новейшее историческо-географическое описание японских островов, рассматривенное природным японцем титулярным советником Николаем Колтыгиным и изданное Иваном Миллером. СПб., 1817) と題する七十頁余の遺著が露都で出版されたと伝えられている。これらの事蹟については、大槻玄澤編『還海異聞』巻之三に、仙台漂民津太夫が伝えた消息が見え、また、播磨檜吉氏「露国に於ける日本語学校の沿革」(『史学雑誌』三三卷一〇号所収)、新村博士の前掲書、龜井高孝氏の『北樵聞略』解説の項、平岡雅英氏の『日



露交渉史話』(昭和十九年) 第五章「ロシアの日本語研究とわが漂流民」などに詳しいのでここでは割愛する。

### III 司天台曆局員足立左内(信頭)と露艦ディアーナ号艦長ゴロヴニン

最後に、足立左内と光太夫将来の算術書との關係を記録した最初の文献『ゴロヴニンの日本幽囚記』(初版一八一六年・ペテルブルグ刊)を中心として、その経緯を概述してみよう。

一八一一年(文化八年)七月、スルーブ艦ディアーナ号艦長ワシーリイ・ミハイロヴィッチ・ゴロヴニン少佐はか乗組員七名は、松前奉行(支配調役奈佐政辰)によって捕えられ、一八一三年(文化十年)十月に釈放されるまで二年余の幽囚生活を日本で送った。一八一三年三月十八日、荒尾但馬守に代わる新奉行服部備後守が松前に到着したが、その随員一行のなかには、通詞村上貞助、天文方の学者足立左内、蘭語通詞の馬場佐十郎がいた。これより先、ゴロヴニンは、一八一二年二月に江戸から派遣された問宮林藏と会談し、問宮海峡の発見や、当時の日本における天文測量術の水準がオランダの文献によって相当に進歩していることを知った。その際の通訳は馬場佐十郎だったが、残念ながら馬場の理解力が十分でなかったため、問宮の質問(太陽と月、または星との距離によって経度を知る方法など)に応ずることができなかった。問宮は非常に不機嫌になり近いうちに江戸から蘭語通詞と学者が派遣されるはずだか

ら、そのときこそ否応なしに答えて頂きますぞ、とゴロヴニンに一矢を報いた。はたして、問宮のいうとおり、足立左内らがやってきたのである。

ゴロヴニンたちは、足立左内のことを学士院会員(актаде-мик)と呼んでいた。つまり、足立がある學術協会の一員で、その協会は西洋の学士院に似たところがあるからだと言われている。

さて、学士院会員足立左内は、ペテルブルグ版国民学校用の簡易算術教科書をロシア語から翻訳しはじめた。これは一七九二年にラクスマンによって送還された日本人光太夫(Korai)が日本へ持ち帰った本であるという。算術の規則を説明してみると、足立は何でも知っていて、ただロシア語による解説を習得したがつていることが分かった。ゴロヴニンは、彼の知識が数学全般に及んでいるかどうかを試そうとして、通詞を通していろいろと質問してみたが、馬場も村上も数学上の知識は皆無に等しく徒勞に終わった。けれども、ゴロヴニンは、日本人の数学に関する知識が、部分的にはいかに偉大なものであったかを証明する二、三の例を引用している。すなわち、足立が、オランダでは新曆を用いているが、ロシアでは如何、と質問したので、ロシアでは旧曆(ユリウス曆)を用いていると答えると、さらに両者の差異について尋ね、その相違はなにゆえに生ずるのかと浴びせてきた。ゴロヴニンが説明すると、足立は、その曆法も不完全だ、なぜならば一定の年限を経過すると、そ

の誤差はふたたび二十四時間に達するからだ、と答えたので、明らかに足立に試問されたのだということに気づいた。また、日本ではコペルニクス (Nicholas Copernicus) の太陽系説を正説とし、天王星とその衛星運動に関する知識をもっていることも分かった。しかし天王星以後に発見された星については知っていなかったようである、とゴロヴニンはのべている。数学の達者な航海士アンドレイ・フレブニコフ (Андрей Фребников) は、幽囚中の退屈を忘れるために、対数、正絃真数、正切真数などの表や、そのほか航海術に必要な表の作成に熱中していたが、足立はこれらの表をすぐさま理解し、それを立証するために、図を描いて正絃、正切が何を意味するかを示した。そこで、日本では幾何学の定理を知っているかどうか、一例としてピタゴラス (Pythagoras) の定理の説明をもとめた。足立はすぐさまコンパスを用いて図を描き、それぞれの平方形を切り取り、二辺の平方を折ったり切ったりして、斜辺の平方の面積にびったりと合致させてしまった。それはまるで手品のよう  
に敏速で、反駁の余地が微塵もなかった。ゴロヴニンは、その具体的方法については言及していないが、多分和算で有名な「勾股弦の理」にもとづく証明方法を用いたのではないかとおもう。さらに、足立は日本人は日蝕や月蝕をきわめて正確に計算できると語り、デ・ラランデ (Joseph Jérôme Le Français de Lalande) の天文学上の諸論文もすでに多く訳されている事実をゴロヴニンに伝えた。ちなみに、昭和二十九年十二月に、

『露国国民学校用算術入門書』をめぐって

上野図書館内蘭学資料研究会主催の「洋学ことはじめ展」が丸善で開かれたが、その『解題目録』 (Catalogue of the books exhibited at the "Yogaku Kotohajime Ten"; earlier phases of Western civilization in Japan. Tokyo, 1954) にあって、大崎正次氏はつぎのように述べておられる。

寛政七年 (一七九五) 大阪から江戸に召されて天文方となつた東岡高橋作左衛門至時が、寛政改暦後、文字通り生命をかけてヨーロッパ天文学の新知識獲得に精励したが、ラランデの著述の研究であった。享和三年 (一八〇三) 『ラランデ曆書管見』十一冊を残し、その業半ばにして彼は倒れたが、文化八年 (一八一二) 幕府は始めて蕃書和解御用の一局を設け、以後天文台は名実共に江戸に於ける蘭学の研究、蘭書翻訳の中心となった。その糸口を開いたのが実に至時による本書の研究であった。著者 Lalande (1732-1807) は、フランス第一流の天文学者であったが、その著『天文学』三卷 (Astronomie, Seconde édition revue et augmentée. 3 tom. Paris, 1771. 仏文原著で東京天文台蔵書) は、当時彼の地にあつてもすぐなる喧伝された。その忠実な蘭訳本 (Astronomia of Sierrekunde, naar den tweeden, verbeterden, en vermeerderden druk uit het Fransch vertaald door Arnoldus Bastian Strabbe. Amsterdam, 1755. 2-4 dln. 1 tafel, 42 platen. 東京天文台蔵書) を入手した高橋至時の本書に対する執心の深さも、さこそとうなずかれる名著で



ある。至時没後、一門によつてなされた事業をかえりみると、門弟伊能忠敬の日本沿岸の測地、同門間重富、重新父子の天体観測、次子澁川景佑の天保改曆など、それらはいずれも、至時によつて示唆慈惠された、ラランデ天文学の実地応用にほかならない。(後略)

ところで、足立左内もまた高橋至時の手附下役として、寛政八年に天文方に入り、司天台曆局員となつたのである。それ以前には、大阪の地に栄えた西洋曆学の麻田剛立の門下生で、同門には、高橋至時、間重富、坂正永、谷以燕など、いわゆる麻田派の面々がいた。足立左内の公務上の年譜は、『天文方代々記』(写本。山路平四郎教授所蔵)に詳しい。本書のなから、主な項目だけを抄録しよう。

○天明三年二月廿六日、養父左内儀、大坂御鉄炮奉行久留勘右衛門組之節、番代被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>旨、同人申渡紙同心相勤。

○寛政八年十一月二日、改曆御用ニ付天文方高橋作左衛門手附下役於<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>御用可<sub>二</sub>相勤<sub>一</sub>旨、御老中方御差図之段、大坂御城代牧野備前守殿被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>候旨、坂東儀左衛門申渡。

○文化六年四月廿六日、曆学御用ニ付江戸表江<sub>二</sub>出府<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>仕旨、被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>。

○同十年正月三日、松前表江罷越、彼地ニ罷在候魯西亜人江対談、彼国言語文字稽古可<sub>レ</sub>仕旨、堀田攝津守殿御書付ヲ以被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>候旨、高橋作左衛門申渡。

○同年五月廿九日、於<sub>二</sub>松前<sub>一</sub>在留魯西亜人彼国之辞書所持致

候由、見合ニモ相成候品ト相聞、相對ニテ為<sub>二</sub>賞請<sub>一</sub>相応之返遣候様、御書付ヲ以被<sub>二</sub>仰渡<sub>一</sub>候旨、松前奉行服部備後守申渡候ニ付、右書籍賞請、帰府之後差上。

○文政七年八月廿六日、魯西亜文字書述仕差上候。

○天保六年八月十八日、魯西亜辞書編輯仕差上候。

○天保七年十一月十七日、去ル文化十二乙亥年以來天文方手附ニテ罷在候節ヨリ天文方澁川助左衛門申合、同人実父遺稿ヲ以編輯仕候、新巧曆書全部四拾冊、並同様遺稿ヲ以助左衛門編輯仕、私校合仕候新修五星法統録全部拾冊、同書図説全部六冊、同書表巻全部拾冊差上候。

○天保十三年八月廿九日、御進献曆書全部九冊差上候。

○弘化元年二月廿三日、寛政曆書全部三拾五冊、同書統録全部五冊差上候。

○弘化二年七月廿三日、病死仕候。

以上が、足立左内の養子足立重太郎によつて記録された主な事項である。天明三年以前のことは未詳であつて、『天文方代々記』には見えない。本書によると、左内は多くの曆書を編集し、著述したほかに、ロシアの文献をも訳述していることが明らかにされている。左内の生涯について研究した過去の業績といえは、おそらく伊吹山一草亭氏の「足立左内に就いて」(『月刊ロシア』第九卷第二号・昭和十八年二月号)、「再び足立左内に就いて」(同上誌・第九卷第三号・昭和十八年三月号)が、ほとんど唯一の貴重な報告であらう。『月刊ロシア』は目下入

手困難であるので、いまその一端を要約してお伝えしておきたい。

足立左内、諱は信頭、字は子秀、溪隣と号した。左内はその通称である。弘化二年乙卯、江戸浅草の曆局官舎に於いて、七十有七歳を以て歿したとあるから、逆算するにその生年は明和六年巳丑にして、十代將軍家治の時代であり、馬場佐十郎の生誕に先んずること十八年である。左内の生父は北村淋築と云ひ、大阪に於いて些か名の知れた医者であつた。幼にして遠縁の足立伊右衛門に養はれ、竟にその家をつぎて足立の姓を冒すに至つた。養父伊右衛門の身分は、大阪の同心であつた。左内も人となるに及んで養父とひとしく同心の職に就いたのであつた。まづ現代の警部補に相当する地位である。これが彼の官歴第一歩であつた。(中略) 左内は、幼少時代より、些か他の兒童と異なる才賦と嗜好を有してゐた。即ち計數を解すること頗る疾く、また星辰を仰いで絶へて倦む気色がなかつたことである。長ずるに至つて、勤務の余暇に算術曆術を独力研究して怠らなかつた。(中略) 文政五年壬午七月、芝蘭まことに折れ易く、佐十郎は不惑にも達せざる若さを以て、浅草曆局内に於いて病歿した。左内の死に先立つこと十三年である。超えて文政七年甲申に、左内は『魯西亜学筌』の稿を終へ、官に献じた。佐十郎の『俄羅斯語小成』の刊行より拾年後にあたつてゐる。(中略) 天保十二年辛丑、幕府に再び改曆の計画起るや、澁川景佑がその当事者

『露国国民学校用算術入門書』をめぐつて

に選任せられたのは当然である。この事業には、左内も頗る有力な参画者として、大いに力を致したのであつた。この新曆は天保十三年壬寅十月に成就せられた。これ世に天保壬寅曆と称せらるるもので、その後二十年間継続せられ、明治五年の改曆に至るまで、本邦に於いて使用せられたものであつた。この新曆法に關し、左内は景佑と偕に『新法曆書』九卷を著し、改曆の基づきし学理を記述した。老齡の左内は、改曆事業と、これに伴つた著述のため、甚しく心身を疲労せしめた。之に加ふるにその長子重太郎の死去したことが、一層に左内の氣力を衰へしめ、その後とかく健康すぐれず病床に伏すことが多かつた。竟に弘化二年乙巳七月一日、曆局官舎に於いて老病のためその長き一生を終つた。遺骸は下谷宗延寺の塋域に葬むられた。左内の著書として世に知らるるものは、『魯西亜学筌』『新法曆書』『渡海新編』なぞであらう。彼の手になつた著述は概ね稀觀書に属するものである。

上述のように、足立左内の生涯はすぐれた科学者としてはまことに地味な營々たる生涯であつた。しかし、十八世紀ロシアの算術書を解説した最初の日本人<sup>アキハタ</sup>「学士會員足立左内」の名は、ゴロヴニンによつて永久に記録されているし、その筆蹟もまた早稲田大学図書館に大切に保存されているわけである。最後に、ゴロヴニンもまた、単なる海軍將校ではなく、伝記作者のグレッッチ(Hinkorai Ibraboviu [Pey])が書いてるように、ロシア学士院通信會員であり、文学・科学・美術愛好者自由協



会員であり、ハリコフ大学の名誉職員でもあった。こうした肩書自体には、もとよりさしたる興味はないけれども、ゴロヴニンが見識ある人物であったことは、当時の日本にたいする認識において、彼の視野が決して狭隘なものでなかったことをもってしても実証することができるであらう。いま、その一端を、「日本国および日本人論」(Замечания о японском государстве и народе)から引用して小稿の附録としよう。

日本の国民教育についていえば、一国民全体を他の国民と比較すると、日本人は天下を通じてもとも教育の進んだ国民である。日本には読み書きのできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もない。(中略)なるほどわが国では科学や芸術を心得ている者はさらに多い。わが国には、空から星を手づかみにしてくるほどの人物もいるが、日本にはそんな人はいないではないか! といえそれまでだが、わが国ではこうした天文学者一人について、三つの数もよみこなせない人間が千人もいるのだ。ヨーロッパ諸国には、偉大な数学者、天文学者、化学者、医学者などがいるが、日本はもちろんこれほどの学者はもっていない。もともと、日本人も科学を知ってはいない。このことは私の幽囚記のなかでついでにのべておいた。しかし、国民を形成しているのはこれらの学者ではない。従って、国民全体をとるならば、日本人はヨーロッパの下層階級よりも諸事についてすぐれた理解をもっている。(中略) もしも、この人口多く、聡明鋭敏で、模

倣力があり、忍耐強く、勤勞意欲に富み、なんでもやりこなす国民の上に、わが国のピョートル大帝ほどの王者が君臨したならば、日本の胎内にかくされてある余力と富源をもって、その王者は多年を要することなく、日本を全東洋に君臨する国家とすることができよう。(中略) やがては、おそらく西洋式な国防政策の成功によって、人類の絶滅に役立つ他のヨーロッパ式の文明的方法をも採用することになり、ついにはわが国のピョートルほどの天才でなくても、情勢の推移に伴って、すべてのヨーロッパの發明が、日本でも適用されるであらう。また、教師たちは、日本側の態度ひとつで、ヨーロッパ中から参集してくるであらう。従って、この公正で実直な国民をからかうようなことはしてはならないと私はおもふ。万一にもなんらかの必然的理由によって、別個の行動に出る必要が生じたならば、あらゆる手段をつくし、全力をあげて決然と善処すべきである。私は、日本人と中国人が、われわれの存命中に西洋の制度を採用して、ヨーロッパ人にとって危険な国民になりうるとまではいわれないが、それは可能なことであるから、おそかれ早かれおこりうるであらう。

(Записки Василия Михайловича Головинина в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах. Часть 3, Замечания о японском государстве и народе. СПб., тип. Н. Греча, 1851, стр. 16-20.)

むすび

以上詳述したように、標記の文献は、

- 一、伊勢漂民、とくに光太夫の事蹟を実証する文化遺産。
- 二、エカテリナ女帝のロシア学制改革記念の算術教科書。
- 三、足立左内とゴロヴニンとの交渉を傍証するわが国最初のロシア算術書。

〔前号訂正〕

蔵 二葉亭四迷旧蔵露文献目録並解題

本誌第二号（昭和三十五年十二月刊）所収の標記小稿について訂正すべき箇所がありますので、余白を借りてお詫びいたします。筆者は、本館所蔵の二葉亭旧蔵露文献の各冊表紙に標記されている邦訳（墨書）を、二葉亭の自筆として紹介しましたが、稲垣達郎博士の御高教により、二葉亭の筆蹟ではないことが判明いたしました。その理由は、一、従来の初期から晩年にかけての筆蹟に、右の墨書と相応するようなものがない。強いていえば、初期のものの中に、部分的にほんの少し通うところがなくはないが、各冊のハリ紙は、初期のものである筈はない。二、一二五頁（小稿）下段の『旅順包圍ノ若士官ノ戦争及捕虜ノ観想』の本には、二葉亭の帰国に際して、在

として、洋学史上に高く評価するに足る逸品である。永らく諸家の筐底に秘されていた本書については、調査を進めればさらに多くの事実が顕出するかもしれないが、それにはなお幾多先学のご指導を仰ぐほかはない。筆者は、足掛け三年間、折にふれて本書と取り組みいたずらに閑日月を弄するとの誹謗を覚悟で小論を進めてきた。しかしながら、たとえ一冊の古書であろうと、その周辺に息づく歴史の流れをおもいうとき、ひとしく温故知新のよろこびを禁しえないのである。（一九六一・一〇・一〇）

留邦人（知人）が記念に贈呈した献辞が扉に書いてある。当時重患者だった二葉亭が、この本にまで標題のハリ紙をするようなことはありえない。

三、おそらくは、逍遙博士が図書館へ寄託するにつけてあるいは、旧蔵書を整理したときに、露文の読める人にハリ紙をさせたのではないかと思う。ハリ紙筆者不明とのことであり、この点、筆者の思い違いのため、大方に御迷惑をおかけしたのではないかとおそれる次第です。なお若干誤植もあり、左記の通りあわせて訂正いたします。

〔正誤表〕

頁(段)	行	目	(誤)	(正)
112	下	右より10行目	557 crp.	577 crp.
114	上	左より4行目	221 crp.	211 crp.
118	上	左より3行目	一〇五頁	一八五頁
118	下	左より8行目	二五二頁	三二五頁

『露国民学校用算術入門書』をめぐって